

一万円札のイデオロギー

岡崎 ひでたか (児童文学者) 雑誌「経済」2016年6月号より

昭和四年生まれのわたしは、日中戦争からアジア・太平洋戦争へ、十六歳の年の終結まで、正義の戦争だとだまされて軍国少年に教育され、次第に学ぶ権利も生きる権利も奪われました。

戦後、青年期の入り口に立ったわたしは、国民をだまして戦争を推進した連中に、腹の底から怒りを持ちました。「だまされない人間になる」。学生時代にはそれでイデオロギー論に執心でした。

最近、「テレビにアベが出てきたら、すぐ消しちゃおう」「わたしは、アベが出たらテレビをひっぱたくわ」という声を聞きます。「いかにして国民をだますかが政治」とする自公政権の欺瞞を見ぬく人が増えたのは、悦ばしいことです。でもわたしは、一万円札のイデオロギーを暴きたい。

社会学者である小熊英二氏の『日本という国』に、当時は新聞記者だった尾崎行雄が、福沢諭吉を訪ねたときのことを、『罅堂自伝』を引用して書かれています。

「そのとき福沢先生は、毛抜きで鼻毛をぬきながら、へんな目付きをして斜めにわたしの顔をながめながら、『おミエーさんは、だれに読ませるつもりで、著述なんかするのかい』と問われた。わたしは、その態度やことばづかいにムッとしたが、怒気をおさえ、襟を正し、厳然として、『大方の識者に見せるため』と答えた。スルト先生は、『馬鹿ものめ！ サルに見せるつもりで書け！ おれなどはいつも、サルに見せるつもりで書いているが、世の中はそれでちょうどいいのだ』と叱咤しつつ、人をひきつけるような笑い方をされた」。

「サルに見せる」にしては、諭吉が『学問のすすめ』冒頭に引用した「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」は、人びとに天の声と響きました。それだけでわたしも騙されたサルでした。諭吉を「民主主義の先駆者」と早とちりしたのです。

それよりも、韓国、中国、台湾の人びとにとって、諭吉は容赦できない相手です。彼は、日本人の心性に、アジア諸民族への侮蔑意識を育てた先導者でしたから。朝鮮人を「頑冥不靈は南洋の土人にも譲らず」「無気力無定見」「軟弱無廉恥の国民」とか、中国人を「あたかも乞食穢多^{えた}」「銭に目のないチャンチャン」、日清戦争は「豚狩りのつもり」など（「時事新報」ほか）、侵略戦争の地ならしと侵略戦争の旗振り役に務め、虐殺まで扇動しています。

ユンジョンオク（元梨花女子大教授）氏は「一万円札に福沢が印刷されているかぎり、日本人は信じられない」と言われたそうですが、日本人として恥ずかしいことです。

論告の正体は、第二次長州征伐のときに、既にはっきりしていました。米の値段は十年前の十倍、困窮した民衆は、暴動や百姓一揆に立ち上がります。幕府軍は長州軍に負け続け。そんなとき諭吉は、幕府に長文の建白書を上程したのです。その要点を紹介すると、

「今回の長州征伐によって、徳川家が再び栄えることは、天下のため喜ばしいことです。この勢いでほかの大名も制圧し、外交については片言も口出しさせないようにしたいものです。長州征伐を進めるには、ご英断をもって外国の軍隊を雇い、長州藩を一揉みにつぶし、意見がましい大名も一挙に征伐してしまえば、徳川家のご威光を輝かすことができます。軍費については、長州藩をつぶせば、長州の収入だった二百万両が毎年幕府に入るので、外国から二千万両を借りても、利息とも二十年で返せます」。

国の独立の危機を招く無責任さ。幕府に意見を言わせない。日本人同士が殺しあい、民百姓に至るまでどん底に落とす戦争は他人ごと、平気の平左です。民主主義のかけらさえありません。以前から「親玉（将軍）のお師匠番」になりたくて、戦争を利用して出世のチャンスを狙ったのです。日清戦争でも明治政府のお師匠番として、国民に戦意を煽ってきました。

日本の紙幣に意図的に載せた植民地主義・人種差別者、好戦思想家の顔、これは憲法の本質に背きます。

一万円札のイデオロギーは戦争法案と重なります。いつまでも「サルにされない」よう、立憲政府

の樹立によって、一万円札の顔を変えたいものと念じてます。

心性〔しんせい〕……心のあり方。（「しんしょう」と呼ぶと、仏教用語で「不変な心の姿」）

頑冥不靈〔かんめいふれい〕……頑固で無知なこと。

無廉恥〔破廉恥(はれんち)の間違いか〕……「廉恥」は、いさぎよく恥を知る心が強いこと。